

学士課程学生の研究データ管理（RDM）学習と実践の現状

藤本 真由子

近年、研究の透明性の確保や推進を目的に、研究データ管理に関する研究や基盤整備、教材の開発が進められている。日本の学士課程学生については、約9割が卒業研究等に取り組みと推定されており、多くの学生が研究を体験する現状にあるといえる。一方で、学士課程学生を主要な対象とした研究データ管理に関する研究は未だ少ない。

本研究では、学士課程学生が学習および実践している研究データ管理の基礎の範囲を明らかにし、今後の研究データ管理に関する制度設計や教材の発展に資することを目的とする。筑波大学の学類生に対しオンラインでの質問紙調査を行い、72件の回答を得た。

その結果、学習経験がある内容は広く、学士課程学生として実践する機会が少ないと考えられる事項についても学んでいる学生がいた。学習者が多い項目は、保存場所の選択、バックアップの取得と保存、フォーマットや媒体の選択、指定された期間の研究データ管理、ファイル等の管理ルール設定、セキュリティの確保、共有や公開の前提、取得経緯や加工内容の文書化であり、各項目に対し学習者の割合は回答者全体の約3割であった。一方、研究データ管理サービス、異動時の保管・継承ルール、リポジトリへの登録、データ管理計画（DMP）の作成は、学習者は存在したが、その割合は低い。項目間の学習者の割合の違いは、科目「データサイエンス」の影響が推測される。

また、学士課程学生の実践が期待される範囲について、すべての項目に実践者が存在したが、その割合は全体の2割程度であった。また、学習経験がなくとも実践しているという回答もすべての項目で得られ、学士課程学生にとっても研究データ管理は無関係な事柄ではないといえる。実践者の多寡は学習者の多寡と強い正の相関があり、それらの割合が低い項目は研究データ管理サービスや異動時の保管・継承ルールであった。

所属や属性によって学生を分類及び比較した結果、情報学群や理工学群の学生は他学群の学生よりも学習している項目数が多かった。また、大学において卒業研究以外の研究活動を経験した学生は他の学生よりも実践している項目が多い。主に情報学群に属する学類が開講する科目において、データ管理を学習する機会が存在するが、全学的に俯瞰すると一部の学生が研究データ管理について学習及び実践した経験があると認識している程度である。

すべての学士課程学生が体系的で網羅的に研究データ管理を学習及び実践するために、大学側には各専門分野に適した学習・実践機会の設置を始めとする環境整備はもちろん、引き続き教員や大学院生らの研究室内の組織文化を形成する関係者への教育なども期待される。また、学習者や実践者の割合が低い項目に注目するなど、現状を踏まえた教材開発が行われることも望まれる。

（指導教員 逸村 裕）